

テレビや新聞の取材も来たので、ご覧になった方も多いと思いますが、私（園長）が「IPAくまもと」の事務局をしている関係で、先日、当園の園庭においてプレーカー（おもしろカー）の贈呈式が行われました。プレーカーというのは、遊具を積んだ車で、被災した子どもたちに遊びの場を出前しようと「日本冒険遊び場づくり協会」さんから「IPAくまもと」に寄贈されたものです。その車を東京から運搬してきてくださったのは、職業プレーリーダー国内第1号の天野秀昭さんでした。天野さんは、30年近くもの間、「子どもたちが遊ぶことの価値を社会的に高め、普及し、実践する活動に携わってきた方です。せっかく天野さんに来て頂いたので、当園で職員研修も行って頂き、職員みんなでも改めて「あそび」の大切さを学ぶことができました。

「遊びには自分を育て、癒す力がある。食べないと体が死んでしまうように、遊ばないと心が死んでしまう。体が弱っていくのは目に見えるので大人も心配するが、心が弱っていても目には見えないので注意が必要。遊びの価値を知らない大人たちは、簡単に子どもたちから遊びを奪っていってしまう。今の社会では、なおさら大人が遊びの価値を認め、しっかりと子どもたちの遊びを保障していってあげないといけない。」と天野さんはおっしゃっておられました。

天野さんの著書より少し抜粋してご紹介します。

ぼくは、「教育」ということばに対し「遊育」ということばを提唱したい。教育の「教」の字は、「教える」「教わる」のいずれもが他動詞だ。ならば、その後続く「育」の字も「育てる」という他動詞になろう。「教える育てる」大人や国の意志を反映したことばだ。この場合、主役は子どもではない。翻って「遊育」。「遊」は「遊ぶ」という自動詞。従って「育」も「育つ」という自動詞となる。つまり、「子どもは遊びながら自ら育つ」。僕の子ども観はここが原点で、もちろんこの時の主役はそれをする子ども以外にはない。

教育を否定しているわけでは決してない。大人がムリにでも出会わせなければ、子どもは戦争や環境問題などについて考える糸口すら持てないかもしれない。大人が引き合わせた切り口から、その子の新たな興味や世界、可能性が広がることも多々ある。問題なのは、圧倒的にバランスが悪いことにある。教育の価値だけを大人は認め、遊育（＝遊びながら育つ）の価値をほとんど無視してきた。子どもの表情や動きが、遊びの中で見違えるほど変化する。そんな例をぼくは数えきれないほど見てきた。その実感からすれば、少なくとも小学生くらいまでは、教育以上に遊育の価値を優先してしかるべきだと考える。

子どもに異変がおこっているのは「教育」の問題だと、その改革に大人は躍起になっている。それはそれでいい。けれど、原因はむしろ「遊育」を認めないことにあるとぼくは断言したい。「教育」の発想だけでは限界なのだ。なぜなら、ムリにでも出会わせられる世界は「自分」があって初めて有効だからだ。そんな「自分」の核をはぐくむあらゆる体験の宝庫が遊びであり、国が「生きる力」を言うのなら、それは遊育の中にこそある。

（天野秀昭 著 ゆじょんとブックレットシリーズ③『子どもはおとなの育ての親』有限会社ゆじょんと）

天野さんに、実際にわが園の園庭の環境を見てもらい、直接アドバイスを頂くこともでき、さっそくできるところから園庭を改造しはじめました。お気づきの方も多いと思いますが、確かに子どもたちの目の輝き方が違ってきています。おもしろそう！やりたい！と思うことは、子どもたちは放っておいてもやりはじめます。そのなかで様々なものを身に付けていきます。もっともっと、子どもも大人もドキドキワクワクするようなワイルドな園の環境を作っていきたいと思っています。